

肥人についての再検討

柴田博子

Rexamination of Koehito (肥人)

SHIBATA Hiroko

はじめに

① 肥人研究史

② 肥人についての再検討

おわりに

【論文要旨】

『統日本紀』、『万葉集』、『令集解』の古記にみえる肥人は、隼人に近い存在として登場し、挙げられているが、読み方と語義ともに諸説あり、近年の国語辞典・歴史事典においても一致していない。本稿では、その研究史を整理し、従来の説の問題点を指摘したうえで、肥人史料を検討していくつかの見通しを示した。

現在の『万葉集』注釈研究では、読みはクマヒトの転訛としてのコマヒトが、語義は肥後国球磨地方の人が定説となっている。コマヒトの読みは一三世紀の仙覚がそれまでのコエヒトの読みをコマヒトに改めたことに始まるが、語義は吉田東伍・喜田貞吉による熊襲説を受け継いだものである。しかし今日、歴史研究のなかに熊襲説を是とする論はない。いっぽう吉田・喜田説を批判した岩橋小彌太は、語義は肥国人であり読みはヒビトを主張したが、これにも反論がある。球磨人説・肥国人説のいずれも無理があり、「肥」を地名で解釈しようとしてきた従来の見方を考え直す必要がある。

七世紀末から八世紀の木簡や正税帳、庸布墨書などに、「肥人」や「肥人部」がウジナとしてみえる。そして肥人には、朝貢記事がみられないこと、分布が九州南部のほか、ウジナでは畿内をはじめ遠江・越後・肥前と広いこと、また百済系渡来人との関係が木簡出土遺跡や『播磨国風土記』の地名起源説話から窺えることなど、隼人とは大きく異なる点を指摘できる。部の設置などからすると肥人はヤマト王権に奉仕する職掌に関わる名称と考えられ、いわゆる人制との関係が推測される。

肥人の読みは確定しがたいが、その職掌は律令国家の形成に伴い、そのなかに解消されていったと思われる。肥人への夷人視が進むのはその後のことと思われる。このように肥人は、律令国家の夷人観の始まりと変容に関わっていると考えられる。

【キーワード】 肥人、隼人、百済系渡来人、人制、夷人観

はじめに

『令集解』賦役令辺遠国条の古記は、辺遠国の夷人雑類の例示に、毛人・阿麻弥（奄美）人と並べて肥人をあげている。

【史料1】『令集解』賦役令辺遠国条古記^①

古記云、夷人雑類謂^ニ毛人、肥人、阿麻弥人等類、問、夷人雑類、一歟、二歟、答、本一末^ニ、仮令、隼人、毛人、本土謂^ニ之夷人^一也、此等雑^ニ居華夏^一謂^ニ之雑類^一也、一云、一種無^レ別。

天平期の古記の認識では、肥人は辺遠の地を本土とする夷人雑類の一種であった。

国史にも一か所、『統日本紀』文武四年（七〇〇）の覓国使剽劫（脅迫）事件に肥人が登場する。

【史料2】『統日本紀』文武四年六月庚辰条^②

薩末比売、久売、波豆、衣評督衣君県、助督衣君弓自美、又肝衝難波、從^ニ肥人等^一、持^レ兵剽^ニ劫覓国使刑部真本等^一、於^レ是勅^ニ竺志惣領^一、准^レ犯決罰。

覓国使刑部真本らは文武二年（六九八）に南島の調査に派遣され、翌文武三年（六九九）十一月に帰朝した^③。このとき刑部真本らが九州南部に寄港していたらしいことが、右史料の剽劫したという加害者側のウジナから分かる。薩末はのちの薩摩国薩摩郡（現在の鹿児島県薩摩川内市の川内川中下流域）、衣は鹿児島湾奥部、のちの大隅国贈於郡（現在の鹿児島県霧島市一帯）^④、肝衝は大隅半島の南東部、のちの大隅国肝属郡（現

在の鹿児島県肝属郡肝付町・南大隅町一帯と推定）と、加害者側はいずれものちの郡名をウジナとしており、地元の有力者とみられる。

比売や難波というヤマト風の固有名、そして衣君県と衣君弓自美が評督・助督の官職と君姓を有するなど、かれらはすでに政府の傘下にあった隼人である。したがってこの事件は、薩摩・贈於・肝属といった九州南端地域における政府に協力的な立場の隼人の有力者が、政府の使者に対抗したと報告されたものである。そのなかで肝衝難波が肥人を従えていたという。前掲した古記が、肥人を隼人と同じもののように挙げ、加えて阿麻弥人と並べているのは、南島調査の一環で肥人と接した刑部真本の報告の影響かもしれない。

このように中央政府の周辺において、肥人を隼人と近いものと認識していたことは、『万葉集』からも窺われる。『万葉集』巻一一に次の二首が続けて掲出されている。いずれも「人麻呂歌集」のものである。

【史料3】『万葉集』巻一一「寄物陳思」（以下、これらの歌は『国歌大観』番号で示す）^⑤

二四九六番歌（原文） 肥人 額髪結在 染木綿 染心 我忘哉一云、所

レ忘目八方

〔読み下し〕肥人の額髪結へる染木綿の染みにし心我忘

れめや一に云ふ、「忘らえめやも」

二四九七番歌（原文） 早人 名負夜音 灼然 吾名謂 嬬侍

〔読み下し〕隼人の名に負ふ夜声いちしろくわが名は告

りつ妻と頼ませ

これらは物に寄せて思いをのべた歌で、二四九六番歌は深く染みこんだ恋心を、肥人の額髪を結う染木綿のようだとうたい、二四九七番歌は自分の名を、隼人の名負いの夜声のように大きくはっきりと名乗った、

とうたったものである。

ところがこの肥人の読みと語義については諸説あり、近年の辞典・事典類においても説明が一致していない。たとえば小学館から二〇〇一年に刊行された『日本国語大辞典 第二版』は、「こまひと」と立項し、『奈良時代、南九州地方（鹿児島）に住んでいたといわれる異種族視された集団。』とする。いっぽうで同じ小学館から、同じ二〇〇一年に刊行された『日本歴史大事典』は、「ひびと」と立項し、『古代、肥前・肥後地方の島嶼部に居住した政府が掌握していない民の称。』とする。^{〔6〕}そこで本稿では、ここに至る研究史を振り返ったうえで、肥人の史料を再検討することにした。

① 肥人研究史

肥人の理解をめぐる研究史は、澤瀉久孝『萬葉集注釋』や中村明蔵「肥人をめぐる諸問題」^{〔7〕}などにいくつか紹介されている。ここでは先学の成果によりつつ、あらためて整理したい。

第一節 『万葉集』古写本における訓

肥人の訓と意味の議論は『万葉集』研究に始まる。歌本文の「肥人」の文字に写本間の異同はみられないが、訓は異なる。『校本萬葉集』^{〔8〕}および前掲した澤瀉久孝『萬葉集注釋』によると、古写本の肥人への訓は大別して、次点（鎌倉時代の仙覚以前の訓）の「コエヒト」と、新点（仙覚による訓）の「コマヒト」がある。次に代表的な例を取り上げよう。

まず訓を平仮名で別行に書く形式の写本として、鎌倉前期、一三世紀前半の写しとされる『嘉暦伝承本』^{〔9〕}では、二四九六番歌には訓が付されていない。

次に、訓を片仮名で別行に書く形式の写本として、天明元年（一七八一）の書写だが、建保三年（一二二五）書写の藤原定家書写本の忠実な転写本で、冷泉家本系統の最善本とされる『廣瀬本』^{〔10〕}は、「コエヒト」と記す。

いっぽう、漢字本文の傍らに片仮名で訓を書く形式をとり、仙覚による文永三年（一二六六）校訂本系で鎌倉後期の二三世紀末〜一四世紀初写とされる『西本願寺本』^{〔11〕}は、漢字本文「肥」の右に青で「コマ」（続く「ヒトノヒタヒカミ」は墨書）、左に墨書で「コエ」を傍書しているが、このうち青訓は従来の訓を仙覚が改めたものである。^{〔12〕}

同じく仙覚文永本系の『京都大学本（曼殊院本）』^{〔13〕}は、一七世紀前半の写本で、漢字本文「肥」の右に青で「コマ」、左に代赭（赤褐色）で「コエ」と傍書している。代赭の書き入れは禁裏御本による校合で、仙覚の寛元四年（一二四六）校訂本の訓を反映するものと考えられており、この寛元時の校訂で仙覚は、従来の訓を保存しておいたという。^{〔14〕}

右をまとめると、平安期にさかのぼる写本には「肥人」の訓を確認できない。非仙覚本の代表である『廣瀬本』から、藤原定家は「コエヒト」訓の本を書写していた。そして仙覚は、「コエ」訓の本を底本として校訂を行ない、文永本では従来の訓を改め「コマ」とした。澤瀉久孝は「コエ、コヒの次点を仙覚がコマと改訓したものと思はれる。」^{〔15〕}と、この間の事情を簡潔に説明する。

なお、仙覚はその著作『萬葉集注釋』ではこの歌を取り上げていない。そのため仙覚の改訓の事情は明らかでない。

第二節 江戸時代末までの研究

肥人をどう読むのかは語義に直結する。そこで次に江戸時代末までの諸説を概ね年代順に、語義を中心に訓みをふくめてみておきたい（表1参照）。

表1 江戸時代末までの「肥人」の訓

年	書名	著者	訓	語義・注釈
応安7(1374)～永享5(1433)	萬葉集目安	(未詳)	コマヒト	高麗人
寛文年間 (1661～1673) 成	萬葉集管見	下河邊長流	ウマヒト	高貴富有の人
貞享3 (1686) 成 元禄3 (1690) 刊	萬葉拾穂抄	北村季吟	ウマヒト	君
貞享4 (1687) 頃初稿本成 元禄3 (1690) 精選本成	萬葉代匠記	契沖	ウマヒト	高貴富有のよき人
正徳年中(1711～1716) 成 宝暦10 (1760) 刊	同文通考	新井白石	コマビト	高麗
享保年間 (1716～1735) 成	萬葉童蒙抄	荷田信名	ウマビト コマビト	カラビト, ハダビト説も紹介し, 決し難しとする
明和6 (1769) 以前成 天保10 (1839) 刊	萬葉考(人麻呂集)	賀茂真淵	コマヒト	肥は狛の誤字
寛政8 (1796) 成 文化6 (1809) 刊	萬葉集目安補正	池永泰良稿 上田秋成補	コマヒト	高麗人はなべて肥大
寛政8 (1796) 序 享和1 (1801) 刊	冠辞統紹	上田秋成	コマビト	高麗人
寛政12 (1800) 成 文化9 (1812) 刊	萬葉集略解	橘千蔭	ウマビト	貴人
文政2 (1819) 序	神字日文傳	平田篤胤	ヒノヒト	肥国人
天保11 (1840) 成	萬葉集古義	鹿持雅澄	ウマヒト	肥たるはうまきことわり
弘化3 (1846) 以前成 嘉永3 (1850) 刊	假字本末 (附録)	伴信友	コマヒト	高麗人

(1) 室町期の注釈

『萬葉集目安』(万葉見安) は、応安七年(一三七四)～永享五年(一四三三)の間に成立したとされる簡便な万葉語辞典で、中近世に広く利用された。『万葉集』の難語句を、漢字本文に傍訓を付した形で抜き出し、略注を加えた注釈書である。¹⁶⁾ここでは「肥人額髪結」と項目を挙げ、「肥」の右に「コマ」、左に「コエ」の訓みを記す。下に注釈として「高麗人ナリ、又ハコエタルヲモ云、又ハコマカニウツクシキヲモ云」と述べており、冒頭に高麗人説をあげ、また太った人と、こまかにうつくしい人の三つの義を並べている。

(2) 高貴富有人(ウマヒト)説

一七世紀には、「肥」の字義からか、肥えた人であるが訓はコエヒトではなくウマヒトと訓み、貴人と解釈する説が唱えられた。

まず、下河邊長流『萬葉集管見』は、「肥人を、こゑ人とよめれ共、其義なし。うま人トよむへし。鳥毛魚も、獣の肉も、肥タルハうまき也。うま人トよむへきなり。うま人は、上に注スル、高貴富有ノ人なり。」¹⁸⁾と、コエヒト訓を「義なし」と批判し、鳥獣の肉も肥えたものはうまいので、ウマヒトと訓むべきであり、それは高貴富有の人だとした。

これを受けて契沖は、『萬葉代匠記』の初稿本で、「うま人は、高貴富有のよき人なり。良家、君子、搢紳、これらを日本紀にうまひとよめり。(中略)長流か抄に、こえ人とよめるを義なしといへり。」と下河邊長流の説を継承した。そのうえで「今の本にはこま人とよめり。高麗人なるへし。いかてこま人とはよめりけむ。今朝鮮の人のわたりくるを見るに、いたくふつ、かにこ

えふとりたるがおほければ、その心をもてやよめりけむ。た、うま人にしたかふへし¹⁹⁾」と、コマヒト訓を検討し、訓はウマヒトを採る。のちの精撰本でも同じである。なお精撰本の自筆本には「額髪結在ト限リテ云ヘルハ風俗ト聞コユレハ若肥人ヲハヒ、トノト読テ、昔肥前肥後ナトノ風俗然リケルニヤ」が抹消されており、ヒヒトと読む肥前肥後説も検討したようである。

北村季吟『萬葉拾穂抄』もウマヒト説を採用し、橘千蔭『萬葉集略解』、鹿持雅澄『萬葉集古義』らが継承した²¹⁾。

(3) 高麗人(コマヒト)説

仙覚のコマヒト訓は、『萬葉集目安』のように高麗人と解釈された。

賀茂真淵『萬葉考』(人麻呂集)は、「こは貊を肥に誤りしにて、本は貊なりけり。然れば訓はよくて字を後誤りし也。」「我朝の古へ男は髪を額に二所ゆひたり、貊人も此如く額にゆひしか」と、「肥」を「貊」の誤字として高麗人とした²²⁾。

いっぽう池永泰良稿・上田秋成補『萬葉集目安補正』では、「高麗人は、なべて肥大なれば、肥人と、義もて書しと云り。いぶかしき説なり。」と、高麗人は太っているから肥字を用いると解する説を、疑問を呈しつつ紹介し、上田秋成『冠辭統紹』は「高麗人は額上にて髪をゆひしと也。」と風俗につなげる²⁴⁾。

なお新井白石『同文通考』や伴信友『假字本末』(附録)は、神代文字や仮名の由来への関心から、『本朝書籍目録』の「肥人書」や『釈日本紀』(巻一開題)の「肥人之字」をとりあげるなかで『万葉集』の「肥人」にも言及している²⁵⁾。

(4) 肥国人(ヒノヒト)説

いっぽう肥国人と解釈する説もみられる。平田篤胤は神代文字の存在

を主張する『神字日文傳』において、「(白石の『同文通考』が)歌の肥人を、常の印木に、コマビトと仮名付たるを見て、言はれたる説なれど、此は非訓なり。ヒノヒトと訓むべし。万葉集略解に、ウマヒトと訓みて、いへる説もあれど、其も非言なり。此は別に論へる物あり。然るは此歌に並べて、(二四九七番歌を引用するが略)と云へる歌あり。早人とは薩摩人の事なるに、かく並べ載せると、仁和寺書目録に、肥人書、薩人書と並べて載せるを以ても、我が肥国人の書なること論ひなし。殊に肥人を高麗人とする事は、ただ万葉集の誤訓を、拠とするより外に、正しき證なき事なるをや²⁶⁾。」と、コマヒト・ウマヒトを否定し、肥国人でありヒノヒトと読むべきと主張した。篤胤にとって神代文字に関わるとみた肥人は、我国の人でなければならなかったであろう。

この篤胤の説に対して、鹿持雅澄は「の」の語を入れて読む例のないことを挙げ、ヒノヒト説を批判している²⁷⁾。

以上、肥の字義を拡大解釈した貴人説、仙覚のコマヒト訓から高麗人説、これを否定した肥国人説がみられた。

第三節 明治以降の研究

(1) 『万葉集』注釈研究

明治以降の、管見にはいった『万葉集』注釈書にみえる肥人の読みと語義をまとめたものが表2である。『日本歌學全書』のウマビトの読みは、鹿持雅澄『萬葉集古義』を受けたものと推測されるが、のちに継承されない。読みは仙覚以来のコマヒト(コマビト)、新たにクマヒト(クマビト)、そしてヒヒト(ヒビト)の三種類がある。

まず一九二五年に春日政治が「肥」字をコマと読みうることを、大矢透による西大寺本金光明最勝王経の古訓点から明らかにした。「古く土地の肥えてゐる義にコマダツ若しくはコマヤクといふ動詞のあったことが知られる」とし、ヲコト点と傍訓を検討して、「肥二」はコマカニか

表2 明治以後の『万葉集』注釈書にみえる「肥人」の訓と語義

刊行年	書名(出版社)	編著者	訓	語義・注釈
1891	日本歌學全書萬葉集中卷 (博文館)	佐佐木弘綱・信綱	ウマビト	貴人
1917	國文口譯叢書萬葉集中卷 (文会堂書店)	折口信夫	クマビト	肥の国における土人
1927	新訓萬葉集下卷 (岩波文庫)	佐佐木信綱	ヒビト	—
1928	萬葉集新考第四 (国民図書)	井上通泰	クマビト	異民族。吉田東伍・喜田貞吉 説に従い熊襲
1930	萬葉集新解下冊 (山海堂)	武田祐吉	ヒビト	肥国を根拠とした民族。岩橋 小彌太の訓による
1932	萬葉集全釋第三冊 (大倉広文堂)	鴻巣盛廣	ヒビト	武田祐吉説に従う。九州南部 にいた異人種
1936	萬葉集総釋第十一 (楽浪書院)	澤瀉久孝・佐伯梅友	コマヒト	—
1937	新校萬葉集 (楽浪書院)	澤瀉久孝・佐伯梅友	コマヒト	—
1942	定本萬葉集三 (岩波書店)	佐佐木信綱・武田祐 吉	ヒビト	—
1944	口譯萬葉集中 (山海堂)	峰岸義秋	クマビト	肥国人
1950	萬葉集全註釋第九 (改造社)	武田祐吉	ヒビト	九州に居住した異風俗の種族
1951	萬葉集評釋第八卷 (東京堂)	窪田空穂	ヒビト	肥の国を本拠としていた異民 族
1951	評釋萬葉集卷四 (六興出版)	佐佐木信綱	ヒビト	九州肥の国を中心として住ん でいた異種族。岩橋説による
1952	萬葉集私注第十一卷 (筑摩書房)	土屋文明	ヒビト	肥の国の人の意
1953	萬葉集大成13本文篇2 (平凡社)	澤瀉久孝・小島憲之・ 佐伯梅友・高木市之 助・久松潜一・正宗敦 夫・尾山篤二郎	コマヒト	南九州に住んだ一種族
1954	日本古典全書萬葉集三 (朝日新聞社)	佐伯梅友・藤森朋夫・ 石井庄司	コマヒト	南九州に住んだ一種族
1955	萬葉集大成4 訓詁篇下 (平凡社)	担当 石井庄司	コマビト	喜田説を参考
1960	古典大系萬葉集三 (岩波書店)	高木市之助・五味智 英・大野晋	コマヒト	玖磨人。九州玖磨地方の人
1962	萬葉集注釋第十一 (中央公論社)	澤瀉久孝	コマヒト	九州玖磨の人
1963	萬葉集本文篇 (塙書房)	佐竹昭広・木下正俊・ 小島憲之	コマヒト	—
1972	萬葉集 (桜楓社)	鶴久・森山隆	コマヒト	—
1973	古典全集萬葉集三 (小学館)	小島憲之・木下正俊・ 佐竹昭広	コマヒト	肥後国玖磨地方に住んだ異民 族の一種か
1974	現代語訳対照萬葉集中 (旺文社文庫)	桜井満	コマヒト	九州南部に住む種族の名
1980	古典集成萬葉集三 (新潮社)	青木生子・井出至・ 伊藤博・清水克彦 橋本四郎	コマヒト	熊本球磨地方の人か

刊行年	書名（出版社）	編著者	訓	語義・注釈
1981	万葉集全訳注原文付三 （講談社）	中西進	コマヒト	熊本県玖磨地方の人 なぜコマというか不明
1989	完訳日本の古典萬葉集四 （小学館）	小島憲之・木下正俊・佐竹昭広	コマヒト	南九州に住んだ異人種の一種 その本拠地は不明
1995	新編全集萬葉集三 （小学館）	小島憲之・木下正俊・東野治之	コマヒト	南九州に住み異人種と見なされた人々 その本拠地は不明
1997	萬葉集釋注六 （集英社）	伊藤博	コマヒト	肥後国球磨地方の人であろう
1998	萬葉集全注卷第十一 （有斐閣）	稲岡耕二	クマヒト	肥後の人 地方名として玖磨地方を指す
2002	新古典大系萬葉集三 （岩波書店）	佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之	コマヒト	球磨の人
2006	和歌文学大系萬葉集三 （明治書院）	稲岡耕二	クマヒト	肥後国玖磨地方の人 畿内に移住し宮廷周辺で勤務についたらしい
2008	新校注萬葉集 （和泉書院）	井出至・毛利正守	コマヒト	—
2009	万葉集全解 4 （筑摩書房）	多田一臣	コマヒト	玖磨地方の人
2009	新版万葉集三 （角川ワイルド文庫）	伊藤博	コマヒト	熊本県球磨地方の人か
2010	萬葉集全歌講義 六 （笠間書院）	阿蘇瑞枝	クマヒト	玖磨人 稲岡耕二説に従う
2014	万葉集三 （岩波文庫）	佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之	コマヒト	球磨の人 肥後国の球磨には染色した木綿の鉢巻で前髪を結う習俗があったのだらう

或はコマヤカニか、何れかに訓んだ」、「かう見て来ると肥人をコマビトと訓じ得ることは、更に言ふを用ゐない。」とする。⁽²⁸⁾しかし従来の語義の高麗人説は、コの上代特殊仮名遣いが異なることから否定される。⁽²⁹⁾

肥人のコマヒトは熊人（熊襲・隼人）であつて、クマヒトであるとしたのは、次にとりあげる吉田東伍・喜田貞吉である。いずれも古代日本の多民族であつたことを論じる日本民族論の一環で言及されたものであつたが、この説は高麗人説に不審を抱いていた『万葉集』注釈研究にすぐに受け入れられ、今日の通説につながるものになつた。コマヒトはクマヒトの転訛と解され、⁽³⁰⁾したがつて読みは大別してコマヒト（クマヒト）とヒビトの二説にまとめられる。後者の、語義は肥国人であつてヒビトと読むと主張したのは、岩橋小彌太である。そこで次に吉田らははじめとする歴史学者の見解をみておきたい。

（2）熊人（熊襲・隼人）説

吉田東伍は、その日鮮同祖論の代表作とされる一八九三年に刊行した『日韓古史断』において、肥人に言及している。⁽³¹⁾本書は緒言で「本編は一に日韓離立の史書と冒称し得へき歟、何となれば其の根本に同ふす所ある二国が相分立せる始末を説く者たれハなり」と述べ（一〇頁）、「太古」「上古」の筑紫と半島諸国の三国鼎立までの歴史を描く。筑紫において熊襲の叛乱を取り上げたところで、「肥薩は熊襲の栖処」とし、「肥人を「万葉集」古訓に「コマヒト」とありと云へと恐らくは「クマヒト」の誤にやあらん、切に之を論ずれば肥人の熊襲の一種たるや明かなり、（略）「万葉集」には隼人肥人の相并へる見れば熊人の義にて当時肥後なる熊襲の別種を肥人と号せりと思はる。」

(二二九頁)と、肥人は熊人であり、熊襲の一種と述べる。

吉田はその後『大日本地名辞書 西国』⁽³³⁾(初版 一九〇一年)の大隅に「襲国」条を設け、熊襲は「球磨贈於」であるとして、次のように記している。「其肥人^{ヒビト}をコマビトとも曰へるより、推して隼人と肥人を襲の国人、はた求磨の国人の同種なりしを知る。コマビトとは熊人にて、求磨の国人の謂のみ、旧説肥人をば高麗人、狛人と解き、高麗国より渡来したる蕃別の裔姓なりと曰ふは、採り難し、其肥人^{ヒビト}とも書せるは、正しく肥国を本拠とせるが故にて、熊人と同義異文なるを知る」(五四三―五四四頁)。このように吉田は球磨の国人であるとした。

次に喜田貞吉は、一九一六年、『歴史地理』誌に連載している「倭人考」の(三)として「肥人考^{くまびとかう}」を著した。⁽³⁴⁾喜田は「倭人考」の(一)「緒論」では冒頭に「さきに夷俘・俘囚を論じ、さらに東人に及び、東方民族に對していささか觀察を試みたる余輩は、さらに眼を西方に転じて、その古代住民を觀察すべき順序となれり。」(二五九頁)と述べ、「西方民族の名称の古史に見ゆるもの、隼人あり、熊襲あり。肥人・薩人あり。多禰人・夜句人・阿麻弥人あり。(略)海神の部下にありと思考せらるる海部・安曇部など、また西方民族の系統に属するものごとし。」(一六〇頁)と複数の名称をあげたうえで、「かく東西相對して異族存在し、後年その異族が全く他と同化して、影を史上に没するに至りたる経過」(一六二頁)を指摘する。そして「倭人そのものに關しては、從來異説最も多く、その關係するところ呉越・朝鮮にも及び、東亜民族の調査上より見るも、研究最も有益なるものあり。これ余輩が特に「倭人考」の標題を掲びたるゆえんなり。」(一六三頁)と趣旨を記す。

連載(二)「熊襲考」に続く(三)「肥人考」において喜田は、『続日本紀』の肥人をはじめ、後掲する『正倉院文書』などの記事を掲げたうえで、『令集解』賦役令辺遠国条の古記をもとに、「肥人が、もと隼人と同種なりきとするも、目前には隼人に対して、區別さるべきあるものを

有せし」として、「その區別は、夷人と華夏に雜居する雜類との別」

「奥州における蝦夷と俘囚との別のごときもの」(二七七頁)とし、「肥人は実に隼人の華夏に雜居せるものなるべし。(略)その本拠の地として認められたりし処は、必ず九州南部地方なり。しかしてこれをクマビトと呼び、肥人と書す。(略)「肥人」と書するは、彼らが多く中央人士の注意に上りたるころには、主として肥の国地方(主に肥後方面か)に住したりしがためなるべく、中にもその玖磨郡の山間は、彼等の根拠の地として、比較的後の時代までも、その種族を止めし所にてあらん。」(二七八頁)と述べる。そして「山の隈に住む肥人に対して、山の背に住む襲人の称も起り得べし。かくてその襲人の最も多く住せし地方に、襲の国の名も生ぜしか。しからは肥人・襲人ともに山人なり。強いて區別すれば、蝦夷の山夷・田夷にも当るべく、襲人は山上にありてもつばら狩獵を業とし、同じ種族ながらも肥人は谷間に住して、農耕を解せしものなるべし。」(二七八―二七九頁)とする。さらに喜田は『万葉集』二四九六番歌を引用して、「木綿にて頭を飾るの風は、古く九州地方の住民に存す。『魏志』に倭人の俗を記したる中に、「木綿を以て招頭す」というものこれに當る。今も薩・隅地方にこの風あり。かの太鼓踊・棒踊など称する技を演ずるさいに、少年、青年らが染めたる布帛をもつて鉢巻をなす風あるもの、参考とすべし。」(二七七頁)と、色鉢巻の風俗に鹿児島との共通性があると指摘した。

色鉢巻の風俗については、一九二四年、伊波普猷が喜田の「肥人考」を引用し、「たゞに九州地方ばかりではなく、南島全体にこの風があったのである。推古朝に大和の朝廷を訪問した南島人は皆この風をしてゐたに相違ない。」⁽³⁵⁾と南島との關係をのべた。喜田は肥人を山人としていたが、伊波の指摘により、以後肥人の南方渡来説や海人説が惹起されてゆく。⁽³⁶⁾

表2に示したように、吉田・喜田説は『万葉集』注釈研究に広く受け

入れられ、仙覚のコマビト訓のコマの語義は肥後国の球磨であるとの解釈が定着するようになった。クマからコマへの転訛説が通説化し、近年の『万葉集』注釈書のなかにもクマヒト訓を付すものがみられる

(3) 肥国人説

次に肥国人説を唱えた岩橋小彌太の見解をみよう。一九一八年、岩橋は「萬葉集の肥人の點に就きて」を発表した。³⁷⁾ 岩橋は、金光明最勝王經の古点により肥人がコマビトと読み得ることを認めたくて、次のように述べる。

「其の上は更に此の点が果して此の歌に叶へりや否やを考へざるべからず。これをコマビトと訓むものとすれば、其の意は如何にといふに先ず、これを字義のまゝに肥えたる人と解くか然らざれば此の文字を借訓として、高麗人を指すものとする、二つの中の何れかの一つならざるべからず、肥えたる人の義とする時は、次の句の「額髪結へる染木綿の」といふ句とうけ合はず。染木綿にて額髪を結ふは、必ずしも肥えたる人に限りてするわざにてもなく、又肥えたる人にふさはしきわざにもあらず。これは必ず此の歌を詠みし大和人の眼に、奇しく稀しく見えたりし異民族の風習をいへるものなるべし。然らばこれを高麗人と解きて宜く叶へるが如くなれど万葉集卷十一の此の歌の次に（二四九七番歌を引用するが略す。柴田注）といふ歌あれば、此の肥人は字面のまゝに九州に住みたりし異民族なる肥人を詠みたるものと見るをよろしとす。

肥人はもと九州の肥後の国のあたりにゐたりし民族にして、これを吉田、喜田の両博士はクマヒトと訓まれたり。其のよしは知り得ざれど肥人は肥の国に因める名にして、肥の国は景行天皇紀、肥前風土記などに、火の国に作れ、ば、肥の文字音のまゝにヒの音を表はせるものなること明なれば、肥人はヒヒト、又はヒノヒトと訓むべきものなり。これをコマヒト、クマヒトと訓むべきいはれはあるまじきなり。されば万葉集旧

版本の点のよろしからざる事も知るべきなり。」（三六―三七頁）

岩橋は、肥国に由来する異民族と解する。そもそも古訓点コマヒトが不適切であると断じるとともに、それにもとづくクマビトも非とする。そこでヒヒトとヒノヒトを出し、鹿持雅澄の「の」を入れない指摘により、³⁸⁾ ヒヒトを選ぶ。

この岩橋説は、佐佐木信綱や武田祐吉、鴻巣盛廣らに継承された（表2参照）。鴻巣は、クマヒト説について「旧訓コマとあるに、引きずられたもので、もしコマの訓がなかったならば、肥をクマとよむ筈はなかったらうと思はれるから、これも捨つべき」と否定する。³⁹⁾

以上のように、仙覚のコマヒト訓を生かし球磨・熊襲由来と解してコマヒトもしくはクマヒトとするか、あるいは「肥」字から肥国を明示するヒヒト（ヒビト）と訓むかが、訓の対立点であった。いっぽう語義はいずれも九州南部あるいは肥後に住む異民族とされている。

日本の敗戦後は、日本人単一民族論が主流になったと評されている。⁴⁰⁾ 『万葉集』注釈書では、表2に示したようにコマヒト（クマヒト）訓が定説となっている。肥人を異民族・異人種・異種族などと記す注釈が一九八〇年代末まで残ったが、その後みられなくなり、球磨地方の人に収斂している。しかし、そもそも吉田・喜田説は日本人多民族論の一環で唱えられたものであることを忘れてはなるまい。クマがコマに転訛するにしても、異民族のみ削除して球磨地方の人を残すのは、いささか弥縫の注釈という問題があるろう。

第四節 近年の歴史学の研究

一九八〇年代後半に『続日本紀』の注釈書が相次いで刊行された。一九八五年に出版された林陸朗校注訓訳『完訳注釈続日本紀 第一分冊』（現代思潮社）では、文武四年六月庚辰条の肥人に「ひひと」の訓を付し、補注において「元来肥前・肥後即ち肥国地方の人々、その首長的豪

族肥君は九州各地に分布。」(補注五、六頁)と記す。これは次に取りあげる志方正和説のような、肥君との関係を認める説に依拠した記述である。

いっぽう一九八九年に出版された新日本古典文学大系『続日本紀二』(岩波書店)の同条では、「くまひと」の訓を付し、脚注において「肥人は熊人で、おそらく肥後国の人。」(二八頁)と記す。この訓と注は、校注者のひとりである稲岡耕二によるものと思われる。⁽⁴¹⁾

このように『続日本紀』の両注釈書においても、読みと語義が一致していない。そこで次に熊本県在住の志方正和、発表当時熊本県在住であった井上辰雄、鹿児島県在住の中村明蔵の、三者の説をみておきたい。

(1) 肥国人の九州南部移住説(肥後国内非居住説)

志方正和は一九六三年、「西南辺境よりみた律令国家」を発表した。⁽⁴²⁾ まず「肥」の文字の訓点だけを考察すればコマビト説は成立し得ることを認めたうえで、肥人そのものの歴史的考察を進めた場合、批判に堪えるかとし、肥人と熊人を同義異文とする説を批判する。喜田貞吉説について「肥人をクマビトと読む自明の前提のもとに、クマビトなるものの存在を裏付けて居られるに過ぎない。」とし、「要するに喜田説も吉田説も肥人をクマビトと訓じなければならぬ理由も根拠もない。」と否定した(六、七頁)。

そして志方は、「肥人は奈良時代前後に於いて、隼人の本土たる大隅、薩摩地方に居住する夷人」であるが、「言葉の本来の表現から考へれば、肥人は当然肥国の人でなければならぬ」(八頁)ことから、肥君が天平八年(七三六)『薩麻国正税帳』にみえることに着目し、「肥君及び肥人は、朝廷の西南辺境政策の一翼を荷って、隼人を律令体制に編入する目的をもって薩摩に居住したのである」(一五頁)、「肥君の移住は、当

然肥人を伴っての移住」(一二頁)であったとする。そして「肥人は之を歴史的に見るかぎり、肥国の人、すなはちヒビト(ヒビト)であって、クマビトでもコマビトでもない。」(一六頁)と、読みをヒビトとした。このように志方は肥人を、肥君に連れられて肥国から移住した薩摩・大隅の住人とみたのである。

(2) 駒を扱う隼人説(肥国と無関係説)

井上辰雄は熊本大学に勤務していた一九七四年、『隼人と大和政権』を刊行した。⁽⁴³⁾ このなかで肥人について、古訓点からコマヒトと読むのが正しいとして、「一般にいわれるように「肥の国の人」を意味するだろうか」と疑問を呈する(二〇二頁)。後掲する『播磨国風土記』の記事や『万葉集』二四九六番歌の色鉢巻の風俗が隼人に通じるとし、「九州の西岸に連なる諸島の隼人は、明らかに漁撈的性格をもつ部族であった」(二〇五頁)。そして『日本書紀』推古天皇二〇年正月条に日向の駒が歌われることから、コマヒトは駒人であるとする。すなわち、「肥人」は「コマヒト」とよむべきで、いわゆる肥の国の人の意味ではない。肥人と「駒」との結びつきが強いことから、隼人の中で、とくに駒などの飼養にあたっていた部族に名づけられたものであったらしい。かれらはまた狩猟や漁撈的な性格も有していたようである。」(九九頁)とする。

肥人の「肥」を地名ではないと井上は主張した。駒とするには飛躍があるが、熊本県在住の研究者が肥人を肥前肥後とは無関係とする説を主張したのは、従来の肥国人説に強い違和感があつたものと想像される。

(3) 肥前・肥後島嶼部海人説(熊襲と無関係説)

最後に鹿児島県において熊襲・隼人研究を牽引してきた中村明蔵の見解を前掲論文「肥人をめぐる諸問題」からみておこう。

中村は、『日本書紀』景行天皇のクマソ征伐の条にクマソの居住地は「襲国」とあり、球磨については別に「熊県」があつて明確に区別しているから、クマソは贈於との関連はあるが球磨との関連は見出し難いこと、球磨（人吉盆地）と贈於（霧島山麓から鹿児島湾奥部）との間には地理的・地形的にも一体感がなく、考古学的にも文化的内容に異質なものがあること、球磨が球磨川によって八代海沿岸部との結びつきをもつのに対し、贈於は大隅の山間部や鹿児島湾沿岸部との結びつきをもつことから、「肥人とクマソとのつながりを認めることはできない」（一四九頁）と否定して吉田・喜田説を批判した。

また肥人は肥国の人の意でヒビトと読むのがよいとするが、肥君との関係は否定する。肥人が肥君に直属するような関係を示す史料も、行動を共にした確証も無いからである。

そこで中村は覓国使剽劫事件に着目し、「肥人が海人集団であり、九州西岸や九州南部、あるいは南島など、各地に拠点（居住地）をもっていたため、覓国使の目的とその利害が対立した」（一五三頁）とみる。肥人の名称は、「その拠点が、多く肥国の沿岸部や島嶼部にあったことによる」（二五四頁）とし、その生業は海人のほか牧畜もしており、『肥前国風土記』松浦郡値賀郷の条に載る「彼の白水郎は馬・牛に富めり」とある「白水郎、すなわち海人というのは肥人であった可能性が大きい。」（一五五頁）と述べる。

このように中村は肥人について、贈於地域と関連するクマソとは無関係であり、肥前肥後沿岸部・島嶼部の海人とみた。ここでも鹿児島県在住の熊襲研究の第一人者が、肥人と熊襲の関係を否定しているのは興味深い。この中村説が、一九九九年の『日本史辞典』（岩波書店）や、前掲した二〇〇一年の『日本歴史大事典』（小学館）に継承されている。

② 肥人についての再検討

今日の肥人についての『万葉集』注釈書の説が、吉田・喜田説、あるいは岩橋説に由来し対立してきたことは、前章でみてきたとおりである。しかしすでに紹介したように、現在、歴史研究のなかに吉田・喜田の唱えた熊襲説を是とする論はみられない。加えて熊本県の研究者が肥後国内の居住を否定、あるいはそもそも肥国との関係を否定したように、いずれも十分な説得力を持っていない。

岩橋や志方、中村などのヒビト説論者は、肥をコマと読みうることを認めたくえて、コマヒト説を批判している。ではヒビト説のとおり肥前肥後を指すと言えるのか。コマヒトと読む説においても、井上辰雄を除いて、みな吉田説に依ってクマを球磨地名に由来するとみているが、まずその前提を考え直すことが必要であろう。そこで次に、肥前肥後の「ヒ」表記を見直したうえで、他史料の肥人を検討したい。

第一節 地名解釈の問題

（１）『肥前国風土記』の地名起源説話⁴⁵

まず肥前肥後の「ヒ」の国の表記を検討したうえで、肥人と照合してみよう。

『肥前国風土記』総記は二つの地名起源説話を載せている。崇神天皇は、「火の下りし国は、火国と謂ふべし」と勅し、健緒組の勲功をあげて「火君健緒鉦」と姓名を賜りこの国を治めさせた。よって「火国」という。後に両国に分けて前後とした。また、景行天皇がクマソを征伐して巡狩した時、天皇が燃える火について尋ねた。土地の者が「是れ火国八代郡火邑なり。但、火の主を知らず」と答えた。天皇は「今、此の燎ゆる火は、是れ人の火にあらず。火国と号くる所以」を知ったと言っ

た、という。なお『新日本紀』が「公望私記」から引く『肥後国風土記』逸文にも、同じ二説話がみえる。

このように大宰府で編纂されたと考えられている風土記⁽⁴⁶⁾における地名起源説話によると、ヒの国の「ヒ」の意味は一貫して「火」であった。これがのちに字としては、ともにヒの乙類で通用する「肥」を用いるようになったのである。

(2) 『日本書紀』における用字⁽⁴⁷⁾

表3は『日本書紀』における記事をまとめたものである。ヒの君・ヒの国造などウジナ・職名にあたる①⑥⑦⑧は「火」のみである。地名のうち②③④が「火」、⑤⑨⑩が「肥」で、うち⑨⑩は「肥後国」と前後に分かれた国名である。西海道諸国の前後の国は、筑紫大宰のもとで一つの事業としてまとめて建てられたと考えられており、その時期は早くても天武十二年(六八三)から一四年(六八五)の国境画定事業時であろうから、少なくとも推古紀の⑨「肥後国」は『日本書紀』編さん時の潤色である。いっぽう⑥で『百済本記』といった海外史料が「火中君」と「火」字で表記していることには注目される。これらから『肥前国風土記』の説話のとおり、火君・火国が本来の意であり用字であったと考えられる。そして持統一〇年(六九六)の⑩は、肥後国を建てた後の記事であろうが、その「郡」字や、③の「火前国」表記からすると、⑩の「肥」字にも潤色の可能性が残る。

八世紀以後の史料は肥前・肥後の「肥」字に統一されている。七世紀代のヒの国の表記を伴う出土文字資料が未発見である現段階では確定的なことを言えないものの、七世紀末までの時期、まだ「肥」字に固定していなかった可能性があるのでなかろうか。「ヒの国の人」の意で「肥」字を使う蓋然性は低いのではないかと思われる。

表3 『日本書紀』におけるヒの国・ヒの君の表記

番号	条文	表記	内容
①	景行12年12月	火国造	熊襲を征討し、その女弟市鹿文を賜る
②	景行18年5月	到火国 故名其国曰火国	葦北より発船し到る 人の火でないことを知り、名付ける(肥前国風土記の第2説話に同じ)
③	神功摂政前4月	北到火前国松浦県	新羅征討に向かう神功皇后が到る
④	安閑2年5月甲寅	火国春日部屯倉	屯倉の設置
⑤	宣化元年5月辛丑	筑紫肥豊三国屯倉	那津官家を整備させる詔
⑥	欽明17年正月	別遣筑紫火君 (百済本記云、筑紫君兄、火中君弟)	百済王子恵の帰国に筑紫の兵を副える
⑦	敏達12年7月丁酉	火葦北国造阿利斯登子	任那復興計画のため達率日羅を召喚する詔
⑧	敏達12年是歳	火葦北国造刑部鞞部阿利斯登之子	日羅が到着した際の発言
⑨	推古17年4月庚子	泊于肥後国葦北津	筑紫大宰から百済人来着の報告
⑩	持統10年4月戊戌	肥後国皮石郡壬生諸石	白村江で唐の捕虜になっていた者への叙位・賜物・免税

(3) 『万葉集』と『続日本紀』の肥人

【史料3】の万葉歌は人麻呂歌集を出典とする。二四九七番歌は隼人を「早人」と表記するが、二四九六番歌は「肥人」であって「火人」などではない。【史料2】の『続日本紀』記事は、「評督」「竺志」など古い表記を残すが、やはり「肥人」である。「火」と「肥」の両方の記載がみられた地名と異なり、肥人に「火人」の併用例はみられない。

また【史料2】の覚国使剽劫事件で肥人が従っていた肝衝難波は、のちの肝属郡という郡名をウジナとする地元の有力者と考えられるが、肝属郡は大隅半島の南東側に位置するため、肥前・肥後国とはまったく接しない。

これらのことを勘案すると、肥人と肥前肥後を確実に結びつけるものは見いだせない。井上辰雄が肥国と無関係説を述べたのは、その限りで妥当であったと考えられる。

いっぽうのコマヒト説は仙覚の訓を重視し、コマをクマの転訛として、クマを球磨地方に由来するとみる。しかし、かりに球磨地方の「熊人」であれば「熊人」のまま、もしくは「球磨人（球麻人）」などと表記すればよいはずである。肥後の球磨ゆえに肥字を用いたという解釈では、示す地域の範囲の広狭が逆転してしまう。コマ（あるいはクマ）に、なぜ「肥」字を当てたのか、大いに疑問を抱かざるをえない。

また、『万葉集』二四九六番歌の色鉢巻について、これを肥人の地元の習俗とし南島との関係や海洋性を指摘する説にも、問題があると思われる。続く二四九七番歌は、宮廷における隼人の吠声という奉仕の姿に掛けて詠んでいるが、そもそもこの吠声は九州南部における習俗ではなく、王宮で要求され、課せられたものである⁽⁴⁹⁾。したがって肥人の色鉢巻も、ヤマトの宮廷周辺における奉仕の姿と理解すべきであろう。鹿児島県の太鼓踊りや棒踊りにおける装束や、南西諸島における鉢巻の習俗をもって、肥人をこれらの地の人々とみなすことはできない。

隼人の「ハヤ」の語義については諸説あるが、必ずしも地名とは解されていないように、肥人の「肥」も地名ではないと思われる。次にとりあげる遠江国における「肥人部」の存在からしても、肥人の「肥」を九州の地名と断じることが困難である。むしろ『万葉集』二四九六番歌からは、肥人がヤマトの王宮に出仕していたことが窺えるのであり、王権からみた、王権との関係性に由来する名称であったのではなからうか。

第二節 一次史料の「肥人」

肥人についての史料は極めて少ないが、管見では一次史料に次の六点を見出している。

【史料4】 静岡県伊場遺跡出土二二号木簡（屋椋帳）⁽⁵¹⁾
肥人部牛麻呂掠一

【史料5】 天平五年（七三三）「右京戸口手実」⁽⁵²⁾
阿太肥人床持売年参拾玖 正女左手黒子

【史料6】 天平一〇年（七三八）「駿河国正税帳」⁽⁵³⁾
肥人部広麻呂上三郡別一日食為单参日上

【史料7】 正倉院所蔵庸布墨書⁽⁵⁴⁾
越後国久正郡夷守郷戸主肥人磐麻呂庸布壹段

【史料8】 大阪府禁野本町遺跡出土二二号木簡⁽⁵⁵⁾ 天平勝
肥人□

【史料9】 佐賀県船石遺跡出土須恵器坏ヘラ書き⁽⁵⁶⁾
肥人

七世紀末から八世紀代の、いずれもウジナとみられるもので、畿内や遠江・越後・肥前と分布は広い。「隼人」のウジナを確認できる一次史料が、管見ではいわゆる「山背国隼人計帳」⁽⁵⁷⁾と天平一四年（七四二）近

江国志何郡古市郷戸口手実⁽⁵⁸⁾の、山城・近江に限られるのと対照的である。特に遠江では二人の肥人部氏を確認でき注目されるので、その史料からみてゆきたい。

(1) 静岡県伊場遺跡の「肥人部牛麻呂」(史料4)

伊場遺跡は、静岡県浜松市中区に所在する、遠江国敷智郡の郡衙や栗原駅に係る官衙遺跡と考えられている。第六次調査で伊場大溝から出土した二一号木簡は、いわゆる屋棟帳である(図1)。敷智評内の複数のサトの人名プラス棟・屋の数量を基本とする記載が数段にわたり記された、七世紀代に遡る木簡である。四〇名以上の人名のなかに「肥人部牛麻呂」がいる。

この棟や屋に続く「一」や「二」の記載については、各人が所有する棟や屋の数量と理解する説が一般的であったが、所有する数量ではなく番号であるとする見解、また数ではなく出挙稲の収納にかかわる合点とする見解などもあり、一致をみていない。⁽⁵⁹⁾

いずれにせよ七世紀後半の敷智評において、肥人部牛麻呂はクラを一

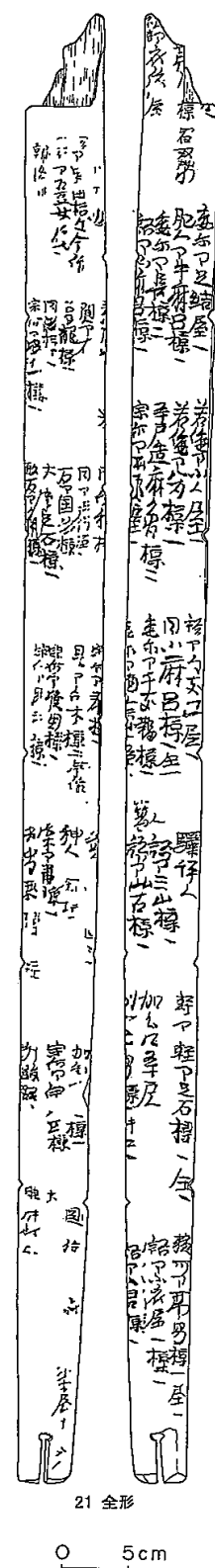


図1 伊場遺跡21号木簡実測図
(『伊場遺跡総括篇』浜松市教委 2008より)

棟所有していたか、その管理にかかわっていた富裕な階層の人物とみられる。

(2) 遠江国使「肥人部広麻呂」(史料9)

天平一〇年の「駿河国正税帳」には、駿河国府に官符をもたした遠江国使のひとりに肥人部広麻呂がいる。国使は遠江国府所在郡である磐田郡の郡散事とあり、肥人部広麻呂もその職にあったとみられる。

郡散事は、野村忠夫の研究によると、「地方における無位の男性下級職員」であり、「国府所在郡および近郡に居住する上級富裕農民層で、郡司の主政・主帳に任用される階層と、ほぼ同じ階層と推測できる」とされる。⁽⁶⁰⁾天平期の肥人部広麻呂も、このような階層の者と考えられる。

敷智郡や磐田郡などの遠江西部地域における肥人部氏は、そのウジナから、大化前代に「肥人部」という部を管掌した小豪族と考えられる。そして遠江に設けられていた肥人部は、肥人(ある

いは肥人氏」を資養するため、ヤマト王権が設けた（認めた）部民であろう。すると肥人の名称はヤマト王権に奉仕する職掌に関係する可能性がでてこよう。

そこで想起されるのが、いわゆる人制である。知られるように、直木孝次郎が「某人」の氏姓を詳しく検討し、それらが大化前代の朝廷の官職名に由来することを指摘して、実務的な下級官人を組織化した人制の存在を論じた。⁽⁶¹⁾ 人制については埼玉県稲荷山古墳出土鉄剣に「杖刀人」銘文が発見されて以後、職業名を中心に研究が進められた。近年も鈴木正信や堀川徹、また平山周三が研究史の整理を行ない、現段階の到達点⁽⁶²⁾が示されている。それによると、人制は中央に出仕するトモを「某人」として組織化する職務分掌の制度であり、五世紀代に実施され、部民制に先行するとみられている。

直木は「人」姓を分類した際、第一類「職業と関係あるもの」、第二类「氏族または種族名と関係あるもの」、第三類「意味不明のもの」に大別し、第二类をさらに「個有氏族系」「国内異族系」「帰化氏族系」に三分して、肥人を隼人とともに「国内異族系」に入れた。そして第二类の「種族名と関係ある人姓についてはなお問題が残るが、史料上最も多く現われる漢人・秦人は、特殊の技能を持ち、それを通じて朝廷と関係を有する帰化人系の氏族であることを思うと、やはり官職とは無関係ではないと考えてよからう」⁽⁶³⁾と、第一類と通底する性格を認めている。

近年、隼人についてその呼称を彼らの奉仕形態に由来し、大化前代の隼人を人制に組み込まれたものと評価する説が出されている。⁽⁶⁴⁾ 肥人についても、やはり王権との関係を示す呼称と考えるのが妥当ではなかろうか。

（3）「肥人磐麻呂」（史料7）と「阿太肥人床持売」（史料51）

「部」を伴わない「肥人」のウジナもみられる。

天平勝宝年間の庸布墨書では、越後国久正郡夷守郷の肥人磐麻呂を確認できる。頸城郡は、天平勝宝年間には越後国の国府所在郡であり、夷守郷は頸城郡内の北東部、旧保倉川が形成した自然堤防上に遺跡が集中する地域を含む、旧大潟以南の地域が比定されている。⁽⁶⁵⁾ 肥人をウジナとするこの戸主磐麻呂は、庸を納める公民である。

また天平五年「右京戸口手実」では、棕垣伊美吉意伎麻呂の寄口のひとりに、阿太肥人床持売がいる。この阿太肥人は複姓である。阿太はおそらく大和国宇智郡阿陀郷の地名に由来するのであろう。⁽⁶⁶⁾

「人」姓の複姓の類例は多い。直木孝次郎がすでに検討しているが、蘆屋倉人・池上掠人や紀酒人・草鹿酒人などの「人」姓のなかで職業と関係ある第一類が断然多数を占め、これに次ぐのが飽波漢人・葦屋漢人など第二类の「帰化系氏族」であることが指摘されている。⁽⁶⁷⁾ 「隼人」の複姓もある。前に触れた「山背国隼人計帳」に大住隼人と隼人国公がみえ、『新撰姓氏録』大和国神別に大角隼人が掲載されている。天平一四年「近江国志何郡古市郷戸口手実」と『新撰姓氏録』山城国神別に阿多隼人がみえる。『続日本後紀』承和三年（八三六）には「山城国人右大⁽⁶⁸⁾衣阿多隼人逆足に姓阿多忌寸を賜ふ」とあり、阿多隼人をウジナとする者が大衣という都における隼人の職務に就いていたことがわかる。ウジナの隼人は、直木のいう職業と関係あるものになっている。

肥人のウジナも職業と関係あるものとなると、どのような職業であったのが問題となるが、残念ながらよく分からない。肥人の飛鳥地域における様子は『万葉集』にうたわれた色鉢巻のみ、また大化前代の活動は『播磨国風土記』収載の説話に窺えるのみである。

そこで残る出土文字資料を取り上げたうえで、最後に『播磨国風土記』の説話をみてゆくことにしたい。

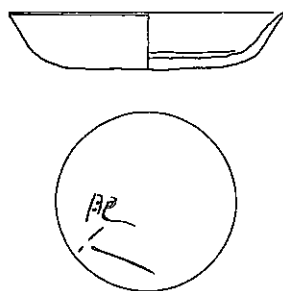


図 2 船石遺跡 6 区出土 120 番ヘラ書き須恵器（1/4）
（『船石遺跡Ⅲ』上峰町教委 1990 より）

の須恵器窯跡は未発見であるが、本遺跡の須恵器は遠方からの搬入品とは考えられておらず、あまり遠くないところに窯があったと想定されている（原田大介氏教示）。古代の三根郡内もしくは西隣の神埼郡内などに窯があったのであろう。ヘラ書きされた「肥人」は人名、一般には納品先もしくは工人のウジナと考えるのが自然であろう。

発掘調査報告書では、円面硯が出土していることから、「奈良時代後半のこの時期この区域を識字階級の人々が占有していたものと考え」ている。さらに溝跡と掘立柱建物、池的施設の「これら三者の配置から、釣り殿、池、池に水を引くための流路を想定」されている^{（73）}。

表 4 船石遺跡 6 区出土のヘラ書き

報告書 遺物番号	器種・記載部位	記載方法	釈文	出土 遺構	備考
71	須恵器高台坏・底部外面	ヘラ	多□□	SK607	
72	須恵器蓋・外面	ヘラ	多□	SK607	
120	須恵器坏・底部外面	ヘラ	肥人	SK612	同じ土壇から円面硯脚部出土
140	土師器坏・底部外面	ヘラ	肥	SK614	破片
160	須恵器高台坏・底部外面	ヘラ	肥	SK623	破片
233	須恵器蓋・外面	ヘラ	多□	SX615	遺構は池的施設

『肥前国風土記』によると、三根郡は神埼郡から分置したもので、郷は六、うち物部郷・漢部郷・米多郷について記事が残り、推古朝に新羅征伐のため来目王子が派遣された時を物部・漢部（忍海漢人移住）の地名起源と記す。

周辺の遺跡をみると、三根郡の郡家は未確認であるが、三養基郡みやき町（旧中原町）の原古賀六本黒木遺跡がその可能性のあるものと指摘されている^{（74）}。船石遺跡の北方約五〇〇メートルには、八藤丘陵と二塚山丘陵の間を遮断する形で、版築工法で築かれた県史跡堤土塁跡がある。その性格は明らかでないが古代に遡る築堤であり、大宰府防衛のための

軍事施設とする見方がある。⁽⁷⁵⁾ 堤土塁跡の東端から八藤丘陵を東西に横断する道路状遺構が検出された八藤遺跡では、「葉」とヘラ書きされた土師器や須恵器の坏が出土している。⁽⁷⁶⁾ また船石遺跡から南西約三キロの丘陵上に目達原古墳群が所在し、丘陵南端部に百済系単弁軒丸瓦が発見されている塔の塚廃寺跡がある。⁽⁷⁷⁾ この瓦は八世紀中葉頃と推定され、また国分寺創建より一段階古いものとの評価がある（亀田修一氏教示）。奈良時代、肥人氏がこのような歴史的環境下にいたらしいのである。

第四節 説話伝承の肥人

さて『播磨国風土記』では、猪飼野の地名起源説話に日向肥人朝戸君が登場する。

【史料10】『播磨国風土記』賀毛郡山田里猪養野条⁽⁷⁹⁾

猪養野。右、号^ニ猪飼^一者、難波高津宮御宇天皇之世、日向肥人、朝戸君、天照大神坐舟於、猪持参来進^レ之。可^レ飼所求申仰。仍所^レ賜^ニ此^一処^一而、放^ニ飼猪^一。故、曰^ニ猪飼野^一。

仁徳天皇の時代に、日向の肥人である朝戸君が、天照大神がいます船に猪を持参して来て飼う所を求めたところ、この地を賜り、猪を放し飼いしたこと、猪飼野の地名になったという。「日向」の指すところは明らかにしたいが、⁽⁸⁰⁾ 播磨国賀毛郡は加古川中流の地域であり、「猪飼野」は現在の兵庫県小野市大開町付近の草加野に想定されている。⁽⁸¹⁾

朝戸氏は、『新撰姓氏録』未定雑姓左京に、「朝戸、百済国人胸広使主朝戸之後也」とみえるので、百済系を称していたことがわかる。また、「戸」を含む氏姓を検して知られるもつとも重要な特性は、そのほとんどが帰化系氏族であるということである。⁽⁸²⁾ という岸俊男の指摘もある。この条では、百済系の朝戸君が肥人であったこと、播磨国の内陸部で

猪の飼育に関与したという伝承が、『播磨国風土記』編纂時に地名起源説話となって採録されたことがわかる。説話の形成時期は明らかではないが、小島憲之によると本条は、『播磨国風土記』に和文体に近い文章が多いことを指摘できる一例であり、漢字をならべて和文としてよむためのもので、漢籍の出典文を改作したものではないとされる。⁽⁸³⁾

ただ猪の飼育⁽⁸⁴⁾ に関する職業名に由来する氏族名としては、猪養氏や猪使連氏があることから、肥人の本来の王権への奉仕が猪飼であったとは言いが切れない。むしろ播磨の内陸部の野の開発に、百済系の朝戸君が肥人として関与したと描かれていることが注目される。

おわりに

本稿では、肥人の語義について、現行の肥後国球磨郡に関わらせる説、肥国に関わらせる説をいずれも否定し、ヤマト王権に奉仕する職掌に関わって理解すべきものであることを論じた。訓は仙覚によるコマヒトのほか、次点のコエヒトの可能性も残る。⁽⁸⁵⁾ しかしコマヒトと改訓した仙覚の根拠が不明であることもあり、現段階では確証がない。そして肥人の職掌は多くの人制の職掌のように、律令国家の形成に伴い、そのなかに解消されていったと想定している。

ところで賦役令辺遠国条の古記は肥人を夷人雑類に含めているが、他に例示された毛人や隼人、阿麻弥人とは違い、肥人に朝貢記事はみえない。肥人部が置かれ、さらに人制の一環とすれば、その職掌の始まりは六世紀、あるいは五世紀末に遡るかもしれない。分布は九州南部のほか、ウジナでは畿内をはじめ遠江・越後・肥前と広く、この点も隼人と異なる。

七世紀末の覓国使剽劫事件においては、肝属地域に肥人がいると認識された。肝属平野には、日本列島最南端かつ古墳時代前期に遡るものを

含む前方後円墳四基・円墳三九基が確認されている塚崎古墳群（鹿児島県肝付町）や、一四〇基の古墳が国史跡に指定されている唐仁古墳群（鹿児島県東串良町）が展開し、中期初頭の唐仁一号墳（唐仁大塚）は墳丘長一五四メートルに復元される九州屈指の大型前方後円墳である。⁽⁸⁶⁾このように肝属平野は、古墳時代前期から中期に多数の高塚墳が造営され、早くからヤマト王権との結びつきがみられた地域である。

永山修一によると、これらの首長たちのなかから、のちの大隅直氏が出てきたと考えられている。そして「直」のカバネを持ちつつ八世紀代の諸史料に大隅隼人として登場することから、七世紀後期に「政府が、文化的には独自性を強めていた南九州の住民を、朝貢すべき「隼人」として位置づけた」と評価されている。⁽⁸⁷⁾

大隅地域の住民に対する位置づけが七世紀後期に変化したことと同様に、肥人についての認識にも、似たような変化があったのではなかろうか。百済系渡来人との深い関係があり、『播磨国風土記』では必ずしも夷人のような性格がみられないにもかかわらず、天平期の古記に毛人や阿麻弥人と並べて夷人雑類とされたのは、大隅隼人の地域に居住し、時に行動を共にしたことが関係していたと推測される。

このような肥人への夷人（異人）視と伝説の形成は、その後さらに進んだようである。承平六年（九三六）度『日本書紀』講書の記録である『日本書紀私記（丁本）』⁽⁸⁸⁾には、「仮名日本紀」についてと仮名の起こりについての問答に続き、次の問答がみえる。博士は矢田部公望であった。

【史料11】『日本書紀私記（丁本）』

問、仮名之字、誰人所作乎。

師説、大蔵省御書之中、有「肥人之字六七枚許」也、先帝於「御書所」令「写給、其字皆用「仮名」、或「其字未」明、或乃川等字、明見「之、若以「彼可」為「始歟」。

ここで肥人は仮名文字の作者に仮託されている。本稿第一章第二節で触れたように、この記事が新井白石・伴信友・平田篤胤らにより、いわゆる神代文字研究の素材にされていた。また鎌倉時代後期の『本朝書籍目録』の「帝紀」末尾近くには、「肥人書五巻、薩人書」と続けて掲げられている。⁽⁸⁹⁾したがって仙覚が『万葉集』二四九六番歌の「肥」をコマと改訓した頃には、すでに肥人についての異人視と伝説化が進んでいたと推測される。そして賀茂真淵は『萬葉考』（人麻呂集）で二四九六番歌の注釈に、「類聚国史異国類に、肥人・薩人をば高麗・百済等の外に挙げしかば」と書いており、偽造とみられる類聚国史に、肥人が薩人とともに異国の類として位置づけられていたことが窺われる。

肥人は百済系渡来人との関わりが窺われ、かつ律令国家の夷人観念の発生と変容に関わっていると考えられるものの、七世紀までの実態など、多くの不明な点を残したまま本稿を閉じざるをえない。諸賢の御示教を賜れば幸いである。

註・引用文献

- (1) 『令集解』は、国立歴史民俗博物館本（田中本）（臨川書店）による。本条の「肥人」字句について新訂増補国史大系本（吉川弘文館）に校異の記載はない。国立国会図書館蔵清原秀賢校合本（いわゆる船橋本）も同じである（国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2570164>）。なお本稿では参照した書名・人名を除き、引用史料・文献を含め、常用漢字体・新字体を使用した。
- (2) 『続日本紀』は新日本古典文学大系本（岩波書店）によるが、本条の「肥人」字句に校異はない。
- (3) 『続日本紀』文武二年四月壬寅条、『同』文武三年一月甲寅条。
- (4) この「衣」をソと読み「衣評」をのちの大隅国曾於郡とみることにについては、江平望「古代「衣評」はどこにあったか」（『続島津忠久とその周辺―薩摩・大隅建國事情散策―』高城書房、二〇一七年、初発表二〇一五年）による。
- (5) 原文、読み下しは、佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之校注『原文万葉集（下）』『万葉集（三）』（岩波文庫、二〇一四年／二〇一六年）による。

るが、傍訓は割愛している。なお本稿では参照した書名を除き、『万葉集』の表記で統一している。

- (6) 永山修一執筆。
- (7) 澤瀉久孝『萬葉集注釋 卷第十一』（中央公論社、一九七九年、初版一九六二年）、中村明蔵「肥人をめぐる諸問題」（『熊襲・隼人の社会史研究』名著出版、一九八六年、初発表一九八三・八四年）
- (8) 佐佐木信綱・橋本進吉・千田憲・武田祐吉・久松潜一編『校本萬葉集 七』（岩波書店、一九三二年）、佐竹昭広・木下正俊・神堀忍・工藤力男 新增補版編『校本萬葉集（新增補版） 十四』（岩波書店、一九八一年）
- (9) 小川靖彦・池原陽斉「伝本一覽」（小川靖彦編『萬葉写本学入門』笠間書院、二〇一六年）九六頁。
- (10) 前掲 小川靖彦・池原陽斉「伝本一覽」九六頁。佐竹昭広・木下正俊・神堀忍・工藤力男 新增補版編『校本萬葉集（新增補版） 十八』（岩波書店、一九九四年）一七頁。なお『廣瀬本』の訓は、廣瀬捨三・佐竹昭広・木下正俊・神堀忍・工藤力男編『校本萬葉集 別冊二』（岩波書店、一九九四年）四五九頁。
- (11) 前掲 小川靖彦・池原陽斉「伝本一覽」九七〜九八頁。「現在刊行されている『萬葉集』のテキストは、例外なくこの本を底本とする。」（同、九八頁）。
- (12) 林勉監修『西本願寺本萬葉集（普及版） 卷第十一』（おうふう、一九九五年）では「コマ」は「茶・朱」と注記されているが（九六頁）、これは「墨の他に朱、青また緑とその褪色した茶褐色や薄墨色で書かれ」（同、一頁）たものに相当する変色と判断される。「青訓は従来の訓を仙覚が改めたもの」（同、一頁）であり、前掲佐佐木信綱ほか編『校本萬葉集 七』では「西「コマ」モト青」と、『西本願寺本』では「コマ」は元は青色であると説明する（二〇〇頁）。
- (13) 前掲 小川靖彦・池原陽斉「伝本一覽」九八〜九九頁。なお本文は京都大学貴重資料デジタルアーカイブ (<https://mda.kuibh.kyoto-u.ac.jp/item/rb00013506>) による。
- (14) 前掲 小川靖彦・池原陽斉「伝本一覽」九九頁、田中大士「万葉集仙覚校訂本のはじまり―仙覚寛元本の復元に挑む―」（前掲小川靖彦編『萬葉写本学入門』三〇頁、武田祐吉「萬葉集諸本系統の研究」（佐佐木信綱ほか編『校本萬葉集 一』岩波書店、一九三二年）二六六頁）。
- (15) 前掲 澤瀉久孝『萬葉集注釋 卷第十一』二二六頁。なお「コヒ」訓は「紀州本」である（同、二二六頁、前掲佐佐木信綱ほか編『校本萬葉集 七』一〇〇頁（ただし神田本と表記））。
- (16) 小川靖彦「『萬葉集目安』の成立と萬葉集訓読について―三條西家旧蔵学習院大学文学部日本語日本文学科研究室蔵本の示すもの―」（『汲古』三二二号、一九九八年）一八頁・二三頁。小川によると、「異訓は概ね目安原本から存したものとと思われる」（二二頁）、「目安は仙覚本（特に文永本）をベースとしつつ仙覚本に残る非仙覚本の訓を訓読に際して重要な参考資料としていたらしい。特に京都大学本諸書入とは密接な関係が認められる」（二二頁）とあり、肥人の訓も、前節で紹介した古写本の訓と、小川の指摘のとおり一致している。
- (17) 国文学研究資料館新日本古典籍総合データベース (<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200006855/viewer/53>) による。館の統一書名は『万葉見安』である。この写本は、慶長から寛永の間に智仁親王の周辺の人物により書写されたものとみられている（前掲 小川靖彦『萬葉集目安』の成立と萬葉集訓読について）二〇頁）。
- (18) 武田祐吉校訂・橋本進吉解説、下河邊長流『萬葉集管見』（萬葉集叢書第六輯、古今書院、一九二五年）一六五頁。なお「上に注スル」とは『万葉集』巻五、八五三番歌の「有麻必等」および『日本書紀』神功皇后摂政元年三月庚子条の歌謡の「字摩比等」、顕宗即位前紀の「君子」の古訓（ウマヒト）を指す。
- (19) 久松潜一校訂『契沖全集 第五卷』（岩波書店、一九七五年）八九頁。
- (20) 前掲久松潜一校訂『契沖全集 第五卷』八九頁。
- (21) 北村季吟『萬葉拾穂抄 第四卷』（新典社、一九七六年）二三三頁。與謝野寛・正宗敦夫・與謝野晶子編纂校訂、日本古典全集刊行会版、橘千蔭『萬葉集略解 第五』（現代思潮社、一九八二年）一四七頁。鹿持雅澄『萬葉集古義 第五』（国書刊行会、一九八八年）一一〇頁。鹿持は契沖の初稿本を引用して論じている。なお荷田信名の『萬葉童蒙抄』は、訓を「こま、うま、から、はだ」と並記し、「いかに共決し難し」と記す（官幣大社稻荷神社編『荷田全集 第四卷』吉川弘文館、一九三〇年、二四八頁）。
- (22) 久松潜一監修『賀茂真淵全集 第二卷』（続群書類従完成会、一九七七年）三六二頁。
- (23) 武田祐吉校訂解説『萬葉集目安補正』（萬葉集叢書第七輯、古今書院、一九二六年）七一頁。
- (24) 上田秋成全集編集委員会編『上田秋成全集 第六卷』（中央公論社、一九九一年）二二八頁。
- (25) 国書刊行会編『新井白石全集 第四卷』（国書刊行会、一九七七年、原本発行一九〇六年）四四二頁。国書刊行会編『伴信友全集 卷三』（ベリカン社、一九七七年、一九〇七年版の覆刻）四八四頁。
- (26) 平田篤胤全集期成会『平田篤胤全集 第十五卷』（法文館書店、一九一八年）二五頁。
- (27) 前掲 鹿持雅澄『萬葉集古義 第五』一一一頁。
- (28) 春日政治『万葉集の肥人』（春日和男編『春日政治著作集 第五冊』勉誠社、一九八四年、初発表一九二五年）二〇頁、二二頁。

- (29) コマヤカのコは甲類、高麗・貉のコは乙類であって、仮名遣いが異なる。前掲春日政治『万葉集の肥人』、同『万葉集と古訓点』(春日和男編『春日政治著作集第五冊』勉誠社、一九八四年、初発表一九五五年)。なおコマヒトと読み得ることを明らかにした春日は、肥人の実態について喜田説を支持していた(前掲『万葉集と古訓点』二二七頁)。
- (30) たとえば前掲澤瀉久孝『萬葉集注釋 卷第十二』は「玖磨(クマ)が「肥(コマ)」になったと見るべきであらう。」と記す(二二七頁)。
- (31) 工藤雅樹『研究史 日本人種論』(吉川弘文館、一九七九年)一六二頁、小熊英二『単一民族神話の起源——日本人の自画像の系譜——』(新曜社、一九九五年)四一二頁。
- (32) 吉田東伍『日韓古史断』(富山房、一九九三年)。
- (33) 吉田東伍『増補 大日本地名辞書 西国』(富山房、一九八二年)。
- (34) 「倭人考」(喜田貞吉著作集 第八卷 民族史の研究)平凡社、一九七九年、初発表は一九一六(一七)年。うち(三)「肥人考」は一九一六年発表。以下の本文引用は著作集による。なお喜田は一九一八年に脱稿した『日向國史上巻』にも「肥人と襲人」の節を設けて詳説している(『日向國史上巻』名著出版、一九七三年、初刊行一九二九年)。
- (35) 伊波普猷「おもろさうし選釈」(『伊波普猷全集 第六卷』平凡社、一九七五年、初発表 一九二四年)八六頁。
- (36) 前掲 中村明蔵「肥人をめぐる諸問題」にいくつか紹介されている。たとえば西村真次は著書『萬葉集の文化史的研究』において、クマビトをクマソと同一としたうえで、南アジアで行われている裏頭から「クマビトを私は苗族など、共同の祖先であった印度支那人(Indo-Chinese)の一支族と見てゐる。」(『萬葉集の文化史的研究』東京堂、一九四七年、初版一九二八年、一六頁)と、インドシナ出身とみる。
- 水野祐も著書『日本民族文化史』の「古典にみえる異族」において肥人を取り上げ、西村説を参照しつつ、「西九州の漁業を生業とした住民」で、隼人とは「別種」であり、「インドシナ人と呼ばれる異人種で、苗族と考える。(略)彼らは北九州の西方の海人であった」と述べる(『日本民族文化史』雄山閣、一九七〇年、二九五～二九七頁)。
- また瀧川政次郎は「猪飼部考(上)(下)」(『日本歴史』二七二・二七三号、一九七一年)において、「肥人すなわち隼人である」(『猪飼部考(上)』七八頁)とし、海南島の原住民が戦乱を逃れて九州西海岸にわたってきたと、隼人・華南渡来説を主張する。
- 日本民族をアジア各種民族の混合とする説が明治維新期に欧米人学者によって唱えられ始めたこと、南方に由来するものにマレー、インドシナ、苗族、華南な
- どの説が早くからあったことについては、前掲工藤雅樹『研究史 日本人種論』、小熊英二『単一民族神話の起源』に詳しい。
- (37) 岩橋小彌太「萬葉集の肥人の點に就きて」(『わか竹』一一卷一二号、大日本歌道奨励会、一九一八年)。これは同誌八巻四号に僅かに記したものを詳しく考えたところ(三四頁)。
- (38) 岩橋は「鹿持雅澄は其の万葉集古義に、紀人、浪華人とこそいへ、紀の人、浪華の人といふ事なければ、これも決くヒトと訓むべしといへり。しばらくこれに従ふべきなり。」(三七頁)と記すが、前掲『萬葉集古義』には、「の」を入れないとあるのみで、ヒトと訓むべしとは書いていない(一一頁)。鹿持はウマヒト説である。
- (39) 鴻巣盛廣『萬葉集全釋 第三冊』(大倉広文堂、一九三二年)四七四頁。
- (40) 前掲 小熊英二『単一民族神話の起源』三三九頁以下。
- (41) 稲岡耕二『萬葉集全注 卷第十二』(有斐閣、一九九八年)に「新古典大系『続日本紀』文武四年六月庚辰条の「肥人」をクマヒトと訓み「おそらく肥後國の人」と注している」と記す(三五七頁)。
- (42) 志方正和「西南辺境よりみた律令国家——万葉集の「肥人」をめぐって——」(『芸林』一四卷一号、一九六三年)。
- (43) 井上辰雄「隼人と大和政権」(学生社、一九七四年)。
- (44) 中村明蔵はたとえば『隼人の古代史』(吉川弘文館、二〇一九年)において、球磨地域と贈於地域の境界付近は一〇〇〇メートル近い山なみの国見山地があつて難所であつたこと、八代海沿岸の古墳時代前期からの高塚古墳造営がやや遅れて人吉盆地におよんで中期には前方後円墳が造営され、後期には装飾横穴墓があるが、いっぽう贈於地域には高塚古墳自体が無いなど、水系の異なる両地域の古墳時代の様相が異質であつたことを指摘する(五一～五四頁)。なお中村「クマソの実態とクマソ観念の成立について」(『熊襲・隼人の社会史研究』名著出版、一九八六年、初発表 一九八〇年)参照。
- (45) 『肥前国風土記』は沖森卓也・佐藤信・八嶋泉編著『豊後国風土記・肥前国風土記』(山川出版社、二〇〇八年)による。ここの「火」字に校異はない。
- (46) 植垣節也は「豊後・肥前の二風土記は、おそらく大宰府で、他の甲類風土記とともに編纂されたものである」ということは認められていると記す(植垣節也「解説」『新編日本古典文学全集 風土記』小学館、一九九七年、六〇二頁)。
- (47) 『日本書紀』は日本古典文学大系本(岩波書店)による。ここの「火」「肥」字に校異はない。
- (48) 鐘江宏之「『国』制の成立——令制国・七道の形成過程——」(笹山晴生先生還暦記念会編『日本律令制論集 上巻』吉川弘文館、一九九三年)。
- (49) 九州南部から上京してきた今隼人は、『延喜式』隼人司条によると、畿内に

- 在住している大衣から吠声の指導を受けることになっていた（中村明蔵「隼人司の成立とその役割」『熊襲・隼人の社会史研究』名著出版、一九八六年、三〇七頁）。
- (50) ハヤトの語義の各説については、中村明蔵「隼人の名義をめぐる諸問題——日本の中華国家の形成と変遷——」（『隼人と律令国家』名著出版、一九九三年、初発表一九八八年）に詳しい。なお最近、熊谷公男は『唐会要』倭国条永徽五年（六五四）の記載から、ハヤに住む人という喜田貞吉以来の地名説を是としている（『蝦夷・隼人と王権——隼人の奉仕形態を中心にして——』仁藤敦史編『古代王権の史実と虚構』竹林舎、二〇一九年、五二〇頁）。しかし隼人居住域にハヤ地名は確認できず、大隅隼人・阿多隼人と称されるように現地の地名は大隅や阿多であった。遣唐使がハヤを地名のように唐皇帝へ報告したとしても、その地名はヤマト王権側が付したものである（なお山背がヤマト目線の地名であるように、オオスミやサツマも隅や端を意味する言葉を含むことからヤマト目線の地名であろう）、王権側からみた役割あるいは特徴など理由のある名称であったことになる。
- (51) 『伊場遺跡発掘調査報告書 第二冊 伊場遺跡総括編（文字資料・年代別総括）』（浜松市教育委員会、二〇〇八年）九頁。
- (52) 『右京戸口手実』（宮内庁正倉院事務所編『正倉院古文書影印集成 一』八木書店、一九八八年）一一七頁。
- (53) 「駿河国税帳」（宮内庁正倉院事務所編『正倉院古文書影印集成 一』八木書店、一九八八年）二二九頁。
- (54) 松島順正編『正倉院寶物銘文集成 圖録』（吉川弘文館、一九七八年）一二八頁、杉本一樹「正倉院の繊維製品と調庸関係銘文——松島順正『正倉院寶物銘文集成』第三編補訂 前編——」（『正倉院紀要』四〇号、二〇一八年）六五頁。
- (55) 『枚方市文化財調査報告第四九集 大阪府枚方市禁野本町遺跡Ⅲ——禁野本町遺跡第一〇三—三次・一〇三—四次発掘調査報告書——』（財団法人枚方市文化財研究調査会、二〇〇六年）一〇二頁。
- (56) 『上峰町文化財調査報告書第八集 船石遺跡Ⅲ——昭和六二年度佐賀県農業基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書——』（上峰町教育委員会、一九九〇年）三九頁。
- (57) 「国郡郷里不詳計帳断簡」（宮内庁正倉院事務所編『正倉院古文書影印集成 五』八木書店、一九九一年）一四二頁以下。この計帳は喜田貞吉が指摘して以来、山背国綴喜郡大住郷のものとの見方が定説化し、年代は天平八・九年ころと推定されている（卯野木盈二「隼人計帳についての若干の見解（一）」『九州史学』二〇号、一九六二年、一九頁）。
- (58) 「近江国志何郡古市郷戸口手実」（宮内庁正倉院事務所編『正倉院古文書影印集成 五』八木書店、一九九一年）一〇二頁。編さん史料であるが『新撰姓氏録』大和国神別に「大角隼人」氏が見えるものの、これを含めても畿内と近江にとどまる。なお『新撰姓氏録』は佐伯有清著『新撰姓氏録の研究 本文篇』（吉川弘文館、一九八一年）による。
- (59) 前掲『伊場遺跡発掘調査報告書 第二冊 伊場遺跡総括編（文字資料・年代別総括）』五七頁。渡辺晃宏「木簡からみた伊場遺跡群」（伊場木簡から古代史を探る会編『伊場木簡と日本古代史』六一書房、二〇一〇年）一三七頁。
- (60) 野村忠夫「いわゆる郡散事（仕）について」（『古代貴族と地方豪族』吉川弘文館、一九八九年、初発表一九七九年）二〇六—二〇七頁。また森公章は郡司クラスに「準じる有力農民」とされる（『国書生に関する基礎的考察』笹山晴生先生還暦記念会編『日本律令制論集 下巻』吉川弘文館、一九九三年、二八九頁）。
- (61) 直木孝次郎「人制の研究——大化前官制の考察、その一——」（『日本古代国家の構造』青木書店、一九五八年）
- (62) 鈴木正信「人制研究の現状と課題——国造制・部民制の史的前提として——」（堀川徹「人制から部民制へ」（篠川賢・大川原竜一・鈴木正信編著『国造制・部民制の研究』八木書店、二〇一七年）、平山周三「近年における古代の人制研究史」（『法政史論』四六号、二〇一九年）
- (63) 前掲直木孝次郎「人制の研究」二六一頁。
- (64) 隼人の呼称が職掌に由来するとの説も古くからあるが、近年、菊池達也は「隼人」の呼称が吠声に由来すること、五世紀後半頃から隼人は「人制」のなかに組み込まれていたことを主張している（菊池達也「大化前代の隼人と倭王権」『律令国家の隼人支配』同成社、二〇一七年、初発表二〇一六年、三四頁）。ただしこれに対する反論も出されている（原口耕一郎「隼人の名義をめぐる『隼人』と日本書紀』同成社、二〇一八年、など）。
- (65) 相沢央「頸城郡の人々と暮らし」（『上越市史 通史編 自然・原始・古代』二〇〇四年）四五〇頁。
- (66) アタ地名として薩摩国阿多郡阿多郷もあるが、この地名に由来する後述の「阿多隼人」氏と、『日本書紀』神代の「吾田君小橋」のように、アタ表記には「阿多」「吾田」が用いられている。いっぽう大和国宇智郡阿陶郷に由来するアタ表記は、「阿太養嶋部」（『日本書紀』神武即位前紀戊午八月条）や「阿太之別」（『古事記』垂仁条大津日子命の分注。『古事記』は小学館新編日本古典文学全集による）、「阿太乃大野」（『万葉集』巻十、二〇九六番歌）のように「阿太」表記がみられる。
- (67) 前掲直木孝次郎「人制の研究」一五〇頁。なお直木孝次郎「複姓の研究——大化前官制の考察、その二——」（『日本古代国家の構造』青木書店、一九五八年）も参照。

- (68) 『続日本後紀』 承和三年六月壬子条。『続日本後紀』は新訂増補国史大系本（吉川弘文館）による。
- (69) 前掲『枚方市文化財調査報告第四九集 大阪府枚方市禁野本町遺跡Ⅲ』、西村健司・山本崇「禁野本町遺跡」（『木簡研究』二七号、二〇〇五年）
- (70) 前掲『枚方市文化財調査報告第四九集 大阪府枚方市禁野本町遺跡Ⅲ』 一〇〇頁。
- (71) 前掲『枚方市文化財調査報告第四九集 大阪府枚方市禁野本町遺跡Ⅲ』 一〇〇頁。なお、これまでの研究で交野郡衙は大阪府交野市郡津付近に比定されていることから、禁野本町遺跡を郡衙跡とは評価されていない。
- (72) 前掲『上峰町文化財調査報告第八集 船石遺跡Ⅲ』 六七頁。
- (73) 前掲『上峰町文化財調査報告第八集 船石遺跡Ⅲ』 六七頁。
- (74) 太田睦「佐賀県中原町・原古賀六本黒木遺跡の調査」（『古代文化』五〇巻五号、一九九八年）
- (75) 前掲『上峰町文化財調査報告第八集 船石遺跡Ⅲ』 四頁、田平徳栄「古代の山城と防衛」（小田富士雄編『風土記の考古学 五「肥前国風土記」の巻』同成社、一九九五年）二〇八頁など。
- (76) 『上峰町文化財調査報告書第一六集 八藤遺跡Ⅲ—平成三〇—五年度佐賀県営農業基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』（上峰町教育委員会、一九九九年）
- (77) 松尾禎作「塔の塚廃寺址」（『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』第七輯、一九四〇年）、同「目達原古墳群」（『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』第九輯、一九五〇年）
- (78) 小田富士雄「肥前の奈良時代寺院跡」（同編『風土記の考古学 五「肥前国風土記」の巻』同成社、一九九五年）二八二頁。
- (79) 『播磨国風土記』は沖森卓也・佐藤信・八嶋泉編著『播磨国風土記』（山川出版社、二〇〇五年）による。ここの「肥人」字句に校異はない。
- (80) なお敷田年治『標注播磨風土記』（国立国会図書館デジタルコレクション <https://dlndt.go.jp/infondtjp/pid/254126>）では、頭注に「肥人朝戸君、和名抄尔、肥後国益城郡郷名麻部有リ、是也。益城ハ日向東堺ひ、上代者彼わたり追日向と云ひし故に、日向ノ肥人トハ云へリ。姓氏録未定難姓ル、朝戸ハ百濟国人胸広使主朝戸之後と有リ」とし、これを多くの「風土記」注釈書が継承している。秋本吉郎校注『日本古典文学大系 風土記』（岩波書店、一九五八年）は「朝戸君」について頭注で「肥後国益城郡麻部郷（和名抄）を本居とした氏族名か。」とし（三四三頁）、また植垣節也校注・訳『新編日本古典文学全集 風土記』（小学館、一九九七年）も頭注に「和名抄」肥後国益城郡麻部郷をあげ、「敷田年治は、上代は益城の辺まで日向といったと説く。」と記す（一一三頁）。しかし、たとえば平野敏也・工藤敬一責任編集『図説熊本県の歴史』（河出書房新社、一九九七年）七一頁掲載の「古代郡表示の地図」を参照すれば、古代の益城郡が日向国とほとんど接していないことが分かる。もとより肥後中部の、九州山地の北側にあたる益城地域が、九州山地南側の日向に含まれていた証拠はなく、敷田説は当たらない。ここには肥人の肥を、肥前肥後のそれと捉えようとしたことの問題点が表出していると思われる。
- (81) 植垣節也「播磨国風土記注釈稿（一四）（賀毛郡・美囊郡）」（『風土記研究』一七号、一九九三年）七二頁、前掲同校注・訳『新編日本古典文学全集 風土記』二七頁。
- (82) 岸俊男「日本における「戸」の源流」（『日本古代籍帳の研究』塙書房、一九七三年、初発表一九六四年）三四頁。
- (83) 小島憲之「諸国風土記の述作」（『上代日本文学と中国文学 上—出典論を中心とする比較文学的考察—』（塙書房、一九八八年、初版一九六二年）六二七、六二八頁。
- (84) 古代の猪の飼育に関して、現在の研究状況に触れておく。
古墳時代に日本列島へ伝来した馬牛と異なり、野生イノシシは少なくとも縄文時代以来現在まで本州・四国・九州島に生息し、狩猟の対象であり続けている。イノシシを家畜化したものがブタで、家畜化はアジアでは中国が最も早く、後漢代の明器にみられる灰陶豚圈（豚小屋）から家屋における飼育形態の一端が窺われる。
- しかし古代日本では、『史料10』から「猪」の放し飼いがあつたと解される程度で、何をどのように飼育していたのかの実態がよく分かっていない。
『続日本紀』天平四年（七三二）七月丁未条には「畿内百姓の私畜猪冊頭」を買い上げて放生させる詔が出されている。また『日本書紀』天智三年（六六四）二月是月条では淡海国からの報告として、坂田郡人小竹田史身の「猪槽の水中」に稲が生え、それを収穫したところ日々富んだという。「猪槽」とは「猪」の飼いはおけであろうか。小竹田史身は他に見えないが、カバネから渡来系氏族と思われる。これらから畿内や近江では、家屋の周辺での飼育が想像される。なお現在のモンズンアジア地域の農山村では、インドネシアやマレーシアのイスラーム圏を除いて、ブタの飼育の形として、舎飼い、放し飼い、放牧・遊牧の三タイプがあるとのことである（池谷和信「人類による動物利用の諸相—モンズンアジアのブタ・人間関係の事例—」松井章編『食の文化フォーラム 野生から家畜へ』ドメス出版、二〇一五年、九六頁）。
- 「猪」を放生させる命令は『続日本紀』養老五年（七二二）七月庚午条にもみえ、「諸国雞猪、悉く本処に放て」と、諸国に対して「雞」とともに指示されている。いっぽう『続日本紀』天平宝字二年（七五八）七月甲戌条の勅では、天下諸国へ

の殺生禁断命令の一環で「猪鹿之類を以て、永く進御することを得ざれ」とあり、鹿と並ぶ。前者はなんらかの飼育下にある「猪」であり、後者は狩猟の対象の野生のものであろう。このように野生と家畜の書き分けがみられず、馬場基は古代日本の史料ではイノシシとブタを区別していないと述べている（前掲松井章編『食の文化フォーラム 野生から家畜へ』の「総合討論」における発言（二二七頁））。

現代の東南アジア・南アジアにおいては、ブタの放牧的飼養や再野生化、イノシシとの種間交雑の調査報告がある（黒澤弥悦・田中和明・田中一栄「ブタ―多源的家畜化と系統・地域分化―」在来家畜研究会編『アジアの在来家畜―家畜の起源と系統史―』名古屋大学出版会、二〇〇九年）。日本では遺跡から出土した獣骨をもとに動物考古学の成果も出されつつあるが、それがブタかどうかの評価は一致していない（小澤智生「縄文・弥生時代に豚は飼われていたか？」『季刊考古学』七三号、二〇〇〇年、西本豊弘「ブタと日本人」同編『人と動物の日本史―動物の考古学―』吉川弘文館、二〇〇八年、など）。家畜育種学からは、「家畜化初期の頃の飼育管理が放し飼いのような粗放的であった場合、さらにイノシシとの交雑もあったとすれば、飼育下のイノシシまたはブタとイノシシを2分することは困難で、形態変化はこれらの間で連続的となる。」と指摘されている（前掲黒澤弥悦ほか「ブタ」二二三頁）。憶測であるが、古代日本の「猪」はこのような状態にあったのではなかろうか。

なおニホンイノシシ *Sus scrofa leucomystax* は、ユーラシア大陸とアフリカ北部および周辺島嶼域に分布するイノシシ *Sus scrofa* の亜種と分類されている。イノシシ科には複数の *Sus* 属があるが、その中でブタの野生原種は *Sus scrofa* 一種であり、*Sus scrofa* 系のイノシシはブタと交雑が可能で、生まれた子どもの生殖能力も正常とのことである（前掲黒澤弥悦ほか「ブタ」二二七―二二八頁）。

(85) 『万葉集』巻五、天平二年（七三〇）大宰帥大伴旅人宅で開催された梅花の宴に列席し、八三四番歌をうたった「少令史田氏肥人」は、「肥人」を個人名とする。佐佐木信綱・橋本進吉・千田憲・武田祐吉・久松潜一編『校本萬葉集 四』（岩波書店、一九三一年）によると、この個人名「肥人」に訓を付している古写本が三本ある。一二世紀後半の書写とみられる『類聚古集』（龍谷大学図書館貴重資料画像データベース www.afc.ryukoku.ac.jp/kycho/collections/ruiyukosyuhm）は、右に朱で「コエヒト」と傍書している。朱の書入れについては「やはり『類聚古集』の本文を示すものであり、本文と共に敦隆本萬葉集もしくはそれに最も近いものであらう。」とされ、それは「非仙覚本系」の本文系統に属する。」と評価されている（小島憲之『「類聚古集」再刊解説』上田萬年校訂・佐佐木信綱解説・小島憲之新解説『類聚古集 一』臨川書店、縮刷新版一九九二年、縮刷再版一九七四年、七頁）。また『京都大学本（曼殊院本）』（京都大学貴重資料デジ

タルアーカイブ <https://rinda.kuib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00013506>）は、「肥」の右に墨で「コヘ」と傍書している。前掲佐佐木信綱ほか編『校本萬葉集 四』によれば、一六世紀後半書写（前掲小川靖彦・池原陽斉「伝本一覽」九八頁）の大矢本も、曼殊院本と同じく「コヘ」とあるとのことである。大矢本・曼殊院本はともに仙覚文永本系統の寂印成俊本の一本である（前掲小川靖彦・池原陽斉「伝本一覽」九八―九九頁）。

(86) 橋本達也「九州南部」（広瀬和雄・和田晴吾編『講座日本の考古学 七 古墳時代上』青木書店、二〇一一年）、吉留潤一郎「唐仁古墳群」・新福深「塚崎古墳群」（『先史・古代の鹿児島資料編』鹿児島県教育委員会、二〇〇五年）

(87) 永山修一「隼人の登場」（『隼人と古代日本』同成社、二〇〇九年）四一頁。

(88) 北川和秀「日本書紀私記」（皆川完一・山本信吉編『国史大系書目解題下』吉川弘文館、二〇〇一年。同じ問答が『新日本紀』（巻二）にも引用されている。なお『日本書紀私記（丁本）』は新訂増補国史大系本（吉川弘文館）による。

(89) 国立国会図書館デジタルコレクション九条侯爵家旧蔵本「本朝書策目録」（<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2540646>）

(90) 前掲 久松潜一監修『賀茂真淵全集 第二巻』三六二頁。

(91) 『類聚国史』において高麗は、現存する巻一九三殊俗部に載っており、高麗の次は渤海である。吉岡眞之は、百済については闕巻の巻一九一・一九二と推定し、また近世に偽造の出回っていたことを指摘している（『類聚国史』前掲皆川完一ほか編『国史大系書目解題下』、二一九頁・一五五頁）。

（宮崎産業経営大学法学部、国立歴史民俗博物館共同研究協力者）
（二〇二二年三月一六日受付、二〇二二年七月二七日審査終了）

Koehito had a close relationship with the settlers from Kudara, unlike the Hayato. From the suffix “be” (部), we can hypothesize that the word was a name associated with the official duties performed by those who served the Yamato Kingdom. Therefore, we can presume that the word has some connection with the so-called *hitosei* (i.e. the system of government officials).

Although it is difficult to determine the pronunciation of Koehito, it seems that their duties were phased out with the formation of the Japanese nation under the *ritsuryō* legal codes. The common assumption that they were *ijin* (i.e. barbarians) emerged much later. In this way, the concept of the Koehito is believed to be connected to how a *ritsuryō* nation started to perceive others as *ijin* and how this perception subsequently evolved.

Key words: Komahito (肥人), Hayato (隼人), settlers from Kudara, system of government officials, attitude to regard others as *ijin* (barbarians) (夷人)

Reexamination of Koehito (肥人)

SHIBATA Hiroko

The Koehito have been mentioned in the ancient texts *Shoku Nihongi*, *Manyoshu*, and *Ryonoshuge* as a group sharing similar characteristics as those exhibited by the Hayato. However, there are various theories regarding the pronunciation and meaning of this word, and there is no consensus on this subject among the recently published Japanese and historical dictionaries. After analyzing the history behind the research of the Koehito and pointing out the problems with existing theories, this paper examines the relevant historical materials and articulates several possibilities.

Existing studies having attempted to interpret *Manyoshu* state that as per the established theory, the pronunciation of word “komahito” is actually a distorted version of “kumahito,” adopting the theory by scholar priest Sengaku who started pronouncing the word as “komahito” instead of traditional “koehito” in the 13th century. Those studies also state that the Koehito refers to the people belonging to the Kuma region of the Higo Province, inheriting the Kumaso theory by Togo Yoshida and Sadakichi Kida. However, within the purview of historical research, there is no contemporary theory advocating the Kumaso theory. Koyata Iwahashi who criticized the theory proposed by Yoshida and Kida insisted that the word referred to the people of Hinokuni and was pronounced “hibito,” which is also controversial. The Kumaso and the Hinokuni theories are both unconvincing, and it is necessary to reconsider these conventional approaches assuming that the Chinese character of “肥” refers to the name of a place.

The Chinese characters for Koehito (i.e. 肥人 and 肥人部) appear as family names in wooden tablets, tax books and *bokusho* on *yofu* (or ink writings on the fabrics submitted as tax) in the period ranging from the end of the 7th century to the 8th century. Additionally, there are significant differences between the Koehito and the Hayato. For instance, there is no mention of Koehito in articles written as tributes to the imperial palace. Moreover, the word Koehito is a family name in the wide region outside Southern Kyushu, and the area encompasses the regions of Kinai, Totomi, Echigo and Hizen. Furthermore, the location of the archaeological site where wooden tablets were excavated and anecdotes regarding the origin of the name of places in *Harima no Kuni Fudoki* indicate that the